

# 高瀬川だより

NPO法人京都高瀬川繁栄会会報  
編集人 田村佐起三

〒六〇四一八〇〇一  
京都市中京区木屋町通三条上ル  
電話 (〇七五) 二二二二・一八二八

## 《西木屋町通を健全に 焼肉「大詔閣」橋渡明さん》

西木屋町通が風俗店にまみれ「何とかして」と言った要望があり、二階建ての風俗店の一階を返還したとき二分割。西木屋町通を一新する目的でその右店舗に馬肉店を誘致、左店舗に私が常連の京劇の横に有った「大詔閣」を誘致、橋渡明店長のお蔭で7年前に開店できました。

西木屋町通は「馬野郎」と「大詔閣」の大繁盛のお蔭で、老若男女が大量に入り乱れ通行、風俗店は段々と影を薄くしてゆきました。

大詔閣は千中の焼き肉店の支店ですが、今や巷で著名店になり、本店を事実上凌いでいます。それは橋渡明さんの人柄と丁寧な包丁さばき、お客様第一で、最高にバランスの良いお肉を提供したことから、お店の隅々まで目を光らせて頑張っておられます。この店の橋渡明さんを紹介した多くの知人から感謝されています。

## 《第33回「天台声明を聴く会」》

5月19日初夜6時 伏見龍雲寺にて **入場無料**

習礼曲目「法華三昧法要」は法華懺法と言う化儀の法要として組み立てられたものであります。法華懺法とは、普賢菩薩を本尊とし、法華経を誦する事を中心を組み立てられている法要です。毎年5月30日三千院でお懺法講が行われています。

日本の尊い文化と伝統音楽を是非ともみなさんにお伝えすることが本会の目的であり、当初、聲明は法要などの儀式であり、一般には公演が成されて居ませんでした。が、天納傳中先生のお知恵により、聲明の練習風景をみなさんにお伝えする「初夜作法 習礼風景・天台聲明を聴く会」を1987年(昭和62年)4月発足し、今年2019年第33回/年を迎えます。

本年7月6日には第4回京都南座声明公演「天台宗京都魚山聲明研究会」と「浄土真宗西本願寺派」が競演されます。

## 私の本棚 おすすめの一冊 粉川 剛

《日本が売られる / 堤未果著》

公営は非効率、民間企業のノウハウ生かせば効率的との掛け声のもと多くの事業が民営化された。確かに民間の力を活用することによりコストが下がりサービスが良くなった事業も多い。しかし全ての事業が民営に向いている訳ではない。本書が指摘するように水道の民営化は各国で行われたが問題が多く再び公営化している国が少なくない。日々の暮らしに直結する事業が民営化により強欲で無責任な海外企業から狙われる恐れを危惧している。本来、国民生活に直結する重要事業の民営化は国会で慎重に議論する必要がある。しかし昨今の国会は「モリ・カケ」のように重要度の低い問題や言葉尻を捕えた些末な事柄の指摘に時間を割き、肝心の国民の安心な暮らしを守るという重要事項にはあまり審議時間を使っていない。これでは与野党を問わず議員は責任を放棄していると言われても仕方が無い。

## 土口哲光和尚の説法

《大関昇進の「恩返し」の口上から》

「受けた恩は必ず返す。感謝の気持ち、思いやりの心をもつ」。春場所千秋楽を終え、大相撲の貴景勝(22)が、大関昇進伝達式の口上に強い決意を込めた。同大関は「強くなって恩返し」だが、一般に言う「恩は着るべきもので、着せるべきものでない」と、恩着せがましいのでは、与えたい恩が帳消しになると。これに似た言葉で「他人から戴いた物は十倍に考える。こちらから捧げた物は半価に恥よ」と、謙虚に止めて感謝することを教える。さらに「一番恐ろしいことは恩に狎れることだ。貰いつけたものは貰うことを何とも思わぬものだ。感謝の心を失えば人生に光も潤いもなく」と。感謝が栄養素で「ありがたい、ありがたい」の日暮らして幸福が恵まれる。

## 季節の家庭料理 田村 真紀

《五月 野菜たっぷり・そば粉のガレット》

そばに含まれるルチンには毛細血管に弾力を与え、血圧を下げる効果が期待できます。

《作り方・四枚分》

そば粉百グラム・水二百五十グラム・卵一個・塩少々・オリーブオイル適量・溶けるチーズ四十グラム・卵四個・新玉ねぎ、アスパラ、トマト(各適量)。食べやすい大きさにカット)・ルッコラ適量。ボウルに卵一個と水を入れよく混ぜ、そば粉、塩をダマが無い様混ぜ合わせラップをして一晩休ませる。フライパンに薄く油をひき温め、生地を1/4量を入れ中火で焼き、中央にチーズ・卵を載せ四隅を畳んで四角にする。ルッコラ以外の野菜を載せ蓋をし弱火で蒸焼きにし、卵が好みの固さになったら塩コショウして皿に盛りルッコラを飾る。

## つれづれの記 山崎 辰巳

《新元号に相応しい国づくりを》

このほど日本固有の元号「平成」にピリオドが打たれ、新元号「令和」が発表された。長く続いた昭和が戦争と、その後の繁栄、国際化を経験したのに対し、平成は未曾有の災害に遭遇し、様々な分野で混迷を極め、決して平穏に過ぎた時代とはいえなかった。新元号に寄せる国民の希望や期待はメディア等で議論されるだろうが、TOKYO2020のように国際基準の西洋歴が用いられる機会も増えるであろう。

元号が新しくなっても日本が急激に変化すると思えないが、少子高齢化の波は否応なく加速し、経済も社会も予期せぬ道を辿るかもしれない。この機に国民は正邪を弁え、健全で躍動的な国づくりを目指したいものだ。